

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ハイスクールD×D

古今無双の系譜

【作者名】

解読

【あらすじ】

ある昔最強の拳士がいた。

その拳士はある占いを信じ子孫の為に戦った。

これはその子孫の話

私は刀語をほとんど知りません知ってるのは最終回の鑢七花の無双回しか知りません。そして主人公がチート過ぎるので嫌いな方は気をつけてください。

プロローグ

「今も昔竹取の翁って聴いてるかよのよお〜赤蜥蜴」

傷だらけでボロボロの服を着た男が言葉を投げかける。

「赤蜥蜴というな下郎」

傷だらけの全裸の女が毒を返す。

「ふっ、こねってよお〜俺の勝ちでいいよなあ？」

そう問うてから服の一部を破り止血をするために左腕に巻く。

「……でいい」

「ああ？なんて言ったよお？」

「勝ちでいいと言ったんだ！」

「ひひっ、じゃあ俺の願い事一つ聞いてもらっつぜ」

男は立ち上がり腹に穴の空いた女を見下ろしながら笑う。

「好きにするといーい」

「言ったな赤蜥蜴」

男は女に背を向ける。

「……犯さないのか？」

「ハッ、俺は嫁さん一筋なんだよ！」

「……」

「てめえに頼みたい事はな、俺の子孫の事だ」

男は肘下からなくなった左腕を握り締め笑い顔から一転、空虚を気だるそうに睨みながら言葉を吐き出した。

「私にお前の一族のお守りをしろと？」

「ちげえ〜よ。何代先になるか分かんねえけどよお、ガキのうちに天涯孤独になっちまう俺の家族が居るらしい」

男は一筋の涙を流す。

「占い師のそんな世迷い事に私は付き合わされる訳か」

「てめえに家族がないからそんな事が言えんだよ、赤蜥蜴」

「……家族か」

「頼むぜえ」

男はそう言って口の愛する妻と子がいる家に歩を進める。

その約束が交わされてから時は過ぎ

「黒猫さんも一人？」

男の子が傷ついた黒猫に声をかけた。

「……」

「生きたい？それとも死ぬ？」

「じゃあ」

弱々しくもしっかりとした声で鳴く。

「生きていてもロクな事なんてないよ」

「じゃあ」

男の子の無気力な声にしっかりとした声で返す黒猫。
男の子は何を思ったか黒猫に手を伸ばす。

「じゃー！」

「……手当をするだけ」

黒猫に翳した手に淡い光が集まり、傷口を塞いでいく。

「じゃー」

「俺ができるのはここまで」

そう言ってから男の子は立ち上がり去っていった。

この出来事から幾ばくの時が過ぎ

男の子は神社続く階段を上っている

(賽銭箱にお金を投げつけてやる)

ハイライトの消えた目そして少しつり上がっている口角。
あともう少しで階段を登りきる所で

「いやあああああああ」

叫び声上がる。

「っ」

目に色が戻るがそれも一瞬ですぐに色がなくなる。

男の子は地を蹴り、風を切る速度で駆ける。

そして、目にしたのは刀を振り上げる男と周囲を囲む男達。

その中心には、何かを抱きしめるように蹲る黒髪の女性。

振り下ろされる刃

間に入り裏拳にて刃を折り弾く。

「な!？」

「どこから入ってきた!!」

「結界はどうした!!」

「……………」

男達が叫んでいる中、男の子は目の前にいる少しの間見つめた後振り返り男達を見る。

「子供だけでこんな所に来ちゃいけないじゃないか」

男の一人が笑みを浮かべながら男の子に近づいた。

右手を背に隠し、手には小刀を握っている。

「……………」

男の子はだた見つめる。

「いい子はお昼寝の時間だよー!」

声を上げ隠していた右手を振り上げるその瞬間

男は絶命した。

顔は声を上げた時のままで振り上げた腕はゆっくりと垂れ下がる。
その男の胸には男の子の右腕が”刺さっていた”

「アハッ、アハハハハハハハ!」

男の子は嗤い声を上げていた。

「な!?よくも」

刀を持った男の顔が宙を舞った。
紅い華が一つ咲いた。

「アハハハハハハハ!!」

男の子は笑いながら蹂躪する。

ある者は心臓を体外で潰され

ある者は頭を真つ二つに割られ

ある者は上半身を下半身から切り離され

ある者は頭を踏み潰され

ある者は胴体のみになれ

男たちは声を上げるまもなく絶命していく。
男の子は返り血を浴び真紅に染まっている。

「あはっ
」

目から一筋の光るものが流れ落ちた。

「……………」

男の子は先ほどくまっていた女性の方を見る。

女性は男の子を見つめ泣いていた。

そして、その女性の腕の中から幼い瞳が男の子を見ていた。

「っ
」

男の子は逃げ出した。

「待って!!
」

女性が叫んだが男の子は止まらず走り去った。

走る奔るはしるハシル

「はあはあはあ
」

自分の両手を見

「ああああああああああアアアアア
!!!!!!
」

ただ叫ぶ。

その空虚な目から涙を流しながら叫ぶ。

「そう叫ぶな」

女性が立っていた。

「「ついいか？お前の苗字は」

” 鑢^{やすり}か？ ”

朝 剣道場 金髪貴公子

「お前は鑓か？」

そう問われ そうだと返してから何年経ったか。
今日の前で全裸で眠ってる女

「起きろ」

「んゝ嫌だ」

「起きてんじゃねえか」

「起きとらんぞ」

「ちっ、面倒くせえ」

「なんだ？その物言いは目の前で極上の女体が全裸でいるというの
に」

「はっ、毎日添い寝していただけたら面倒にもなるよ」

「これだから童貞の坊やは」

「その童貞を食った奴が何をほざいてんだか」

「そうだったな、お前は立派な大人だ」

「早く離れる、朝飯が作れん」

「仕方ない美味しいのを頼むぞ八交やっしゅう」

「わかってるよ紅緋べにひ」

朝食を作る基飯全般は俺が作っている。

ガキの頃に救ってもらった手前、頭が上がらない。

まあ、あの性格に色々助けられているから余り文句は言えねえか。

色々助けてはもらっているがたかだか10歳のガキを食う奴があるかってんだよ！

思い出すとイライラしてきた。

「何が極上の女体だったの」

「まだか」

「もうちょっとだ」

俺の声を聞いて大人しく待っている紅緋。
ホント、黙ってりゃいい女なんだけどな。
中身で損してるな。

「八交何かいらん事を考えてないか？」

「べっつに」

そっちながら今日の朝食を並べていく。

秋刀魚の塩焼き

味噌汁

卵焼き

小松菜の胡麻和え

かしわご飯

我ながらなかなかの出来だと思う。

「いただきます」

食事を始める

「八交」

「んだよ」

「卵焼き」

「……」

「た・ま・ご・や・き」

「そんなに声出さなくても聞こえてるよ」

「よ・ご・せ」

「……ほ」

「ありがとう」

「どういたしまして」

はあ、最後のありがとうがとっぴらしいな感じですけど素直ならかなり助かるんだけどなあ。

その後も何気ない会話をしつつ箸は進み。

「「し」ちそつちまどした」

「んじゃ、学校に行ってくるわ」

「ん？もう行くのか？」

「今日はちと予定があつてな」

「女か？学校でするのはいいが気をつけるよ？」

「はあ、なんで女イコール性交なんだよ？」

「それ以外にすることがあるのか？」

「さあな」

「まあいいさ、気をつけてな」

「……………」

後ろ手に手を振って学校に向かう

「でこんな朝早くから俺を剣道場呼び出してなんの用だ？
木場 郁陽」

「いやね、鑓君は武術か何かやってそんな身体付きだったから少し手
合わせしてみたくて」

「バトルジャンキー
戦闘狂かよ」

「ただ、僕は強くなりたいだけだよ」

「俺がお前より弱いって可能性は考えてないのかよ」

「その時はその時だよ」

そうやって微笑む木場

微笑む姿だけ見てたらどんな韓国ドラマだよ言いたくなるけど、そ
こに木刀があつたらなあ。

常日頃から笑顔を振りまいてるからお前は“陽の貴公子”なんて
呼ばれるんだよ。

まあ、流すか。

「じゃあ、僕から行かせてもらつよ」

「……」

木場突っ込んできてから小一時間

俺は畳の上で大の字で寝っ転がっている。

木刀を振り下ろされては流し

木刀を切り上げられては躲し

木刀を横薙ぎに振られたのを止め

ある程度したら飽きたのでわざと喰らって寝そべって降参の意を示した。

「はあはあはあ」

「降参降参、いやあく参った」

「ふざけているのかい？」

「俺はな攻めるの苦手なんだよ」

「……そうなんだ、また手合わせをしてもらってもいいかな？」

「今日以上の事なんてないぞ？」

「色々勉強になったからまたお願いしたいんだ」

「ああ〜まあ予定が空いてたらな」

「よろしく、鑓君」

手を差し伸べてくる木場

「さっきも言ったが予定が空いてたらな」

木場が今まで駒王学園でぼっちだった俺の初めてのダチになるのはもう少し先の話

光 槍 今日的一面

《熱愛発覚!? 鑓 八交と木場 郁陽 親に挨拶まで行ったとの声が
!?!?》

学校の掲示板にデカでかと貼られている新聞部によって作られた
週一新聞

「ちっ、面倒くせえ」

「こっボヤいた俺は悪くねえはずだ。

あの剣道場の一件から大体一ヶ月過ぎ、二丁三回木場と試合をした
くらいで何も問題は起こってない

それなのに周囲のやつは勝手に勘ぐるから面倒くせえ。

「おはよう、鑓君」

「ああ」

「な、何か僕がわかることとしてしまったかな？」

「あ? てめえじゃねえよ。これだよ」

そう言って俺は背にある掲示板に視線を向けるように木場に手で合図を送る。

「何々、熱愛発覚 鑓八交と木場郁陽ってなんなんだいこれは!」

「新聞部の捏造」

「鑓君、捏造って」

「捏造以外何があんだよ？偽装か……偽装だと何か真実があるわけだしな、ああ面倒くせえ」

「その、何かごめんね」

「あ？なんでてめえが謝んだよ」

「僕が誘ったせいでこんな事になってしまったからね」

そう俯きながら言ってくる。

ちっ、面倒くせえな

「周りがきゃあきゃあ勝手に鳴いてるだけだろ、ほっときゃ収まんだろ」

「ふふっ、ありがとっ鑓君」

「はっ、じゃあな」

ほっときゃ収まると思っていた時期が俺にもありました。

「これは事実なのかしら鑢八交君」

「はあ面倒くせえ」

今俺はオカルトチックな文様が書かれた部屋にいる。
何故こんなところに居るかというと

家に帰ろうとして下駄箱の所について靴を履いて学校からおさらばって思ったら目の前を赤髪の巨乳と黒髪の巨乳と木場が道をふさいでいて

「あなたが鑢八交君？少しオカルト研究部まで来てくれないかしら」
「？」

って言われて拒絶することも叶わぬまま拉致されたわけだが。
まったく何だっつてんだよ、面倒くせえ

……全力で逃げてみるか？

いや、それこそ後々面倒な事になりそうだしなあ

「聞いているのかしら？鑢八交君？」

「聞こえていますよ」

「で？これは事実なのかしら？」

「木場と親しいなら木場に聞いたらいんじゃないですか？」

「郁陽にも聞いたけど、貴方が脅してないとも限らないじゃない」

「脅してもいけませんし熱愛なんて事実はどこにもありません、これで満足ですか？」

「その証拠は？」

「ああ、少し下品ですけど木場ってまだ処女でしょ？」

少しニヤケながら言っただけ。

事実無根の事に拉致られて、尋問されたんだ。

これくらいの反撃があってもいいだろ？

「な!?!」

「あらあら」

「まったく君ってやつは」

面喰らってるのが一人だけってのが少し気に食わないっちゃ気に食わないが、一番やり返したい奴を驚かせたからそれでいいや。

「じゃ、帰っていいですか？急がないと特売終わっちゃうんで帰っていいですか？」

「はあ、いいわ。そんなふざけた事が言えるって事はこれは本当に嘘みたいね」

「えらく簡単に信じるんですね」

「貴方をここに呼んだの本当の理由はこの事を聞くためじゃないの」

「は？」

「って事はこんなふうに尋問されてたのは無駄って事か。」

「……ったく、時間の無駄遣いじゃねえか。」

「それに貴方の事はずっと郁陽から聞いていたから今回のこれはちよっとした悪戯よ」

「……」

「^{マジ}本気でウゼエ

「ウインクしながら指立てていう事かよ、美人じゃなかったら確実に殴り飛ばしてるな。」

「それによお〜ここまでの尋問が全部無駄ってなんでここに拉致られたんだよ。」

「今回、貴方をここまで連れてきたのは朱乃が貴方に聞きたい事があるっていったからなのよ」

「えっとさ、朱乃ってどなたさん？」

「もしかして私たちの事を知らないのかしら？」

「知りませんがもしかして有名人でした？」

「!？」

赤髪の女が少しびっくりした顔をしてんだけど、ほんとに有名人な

のか？

まだ入学して数ヶ月なんだが。

……ってことは木場以外の二人は先輩って事か？

「だから言ったでしょう、鑓君は知らないって」

「ええ、郁陽の言った通りの人みたいね。自己紹介が遅れてごめんなさい、私はリアス・グレモリーよ。学年は貴方の一つ上で二年生よ」

「あたしが姫島朱乃ですね。学年はリアスと同じく二年生です」

「あゝ、もう知ってると思いますけど、鑓八交です。学年は一年生……で姫島先輩みたいな美人さんが俺みたいな奴になんの御用ですか？」

グレモリーが目配せをすると木場と共に部屋から出ていった。少しの間部屋に静寂の時間が訪れる。

(なんだよこの空気)

「鑓君一つだけよろしいかしら？」

「それを答えて早く帰れるなら答えますよ」

「昔の事ですが、貴方は昔神社で母娘守った事はありませんか？」

「……知りませんよ」

そつと言って顔を背ける。

「真面目に答えてください！」

そう言って顔を両手で押さえて強制的に姫島の方に向けさせられる。

っすっすっす顔近いんですけどぉ〜キスしそうなくらい近いんですけどぉ〜。

そしてものすっごく泣きそうな顔してるんですけどぉ〜。

「ちとら思い出したくない時期の話だっつうのによ。」

「はあ、わかったよ。確かに昔神社で殺戮事件を起こしましたよ」

「やっど、やっど会えましたっ!」

そう言って何故か顔の距離がゼロになった。

（ああ、今俺キスされてるわ〜）

ただただ冷静に考えている俺がいた。

主人公&オリキャラ設定（1/27第一回改）

名前 鑢やすり 八交やじょう

年齢 15歳（現時点で）

性別 男

身長 178cm

性格

面倒臭がり口は基本的に悪いが初対面の人やあまり関わりのない人には極力丁寧な口調で話す。
ただ心の中の口は常時悪い。

そしてツンデレ
割合としては8ツン対2デレ
デレを見ることができるとラッキーな事が起きるとか起きないとか。
か。

大切な人を馬鹿にされると簡単にキレル

設定等

幼少の頃両親を亡くす（詳細は原作で語る予定）

両親を亡くしてから紅緋が家族になるまでは死んだ魚のような目で日夜過ごしていた。

面倒臭がり屋口癖が「面倒くせえ」

趣味は「料理」(とても上手)

10歳の時に紅緋に食われる(もちろん性的な意味で)

髪の色が黒で前髪に白のメッシュが入っている

長さは鑢七花と同じ

瞳の色は黒(スイッチが入ると…)

体付きは細マッチョ(イメージは鑢七花)

両親は父 鑢 七花

母 とがめ(容赦姫)

能力等

見稽古

剣術

(ただし居合のみ、居合以外だと振り上げた時に刀がどこかに飛んでいくという謎の現象が起きる)

柔術

虚刀流

昇華(見稽古で見た技を自分に合うように最適化する)

続いてオリキャラ

名前 紅緋

年齢 25(見た目)

性別 女

身長 170cm

性格

人をからかうのが大好き。

下品というかエロい。

デレがよくわからない。

イメージで言えばコード アスのC・C・Cが最も近い

設定

八交が幼少の頃に家族になった。

家で仕事をするわけでもなくただただぐーたらしている。

ぐーたらしているのに何故か一家の大黒柱である

趣味は「食うこと」(色んな意味で)

10歳の八交を美味しく頂いた張本人(とても美味しかったらしい)

好きな物は「八交の手料理」

髪の毛の色は赤

長さはセミロング

体型はボン・キュ・ボン

肌の色が褐色

10歳の八交を美味しく頂いた張本人

鑓の家系とは昔から交流があるらしい。

ネタバレになるかもしれないので以下を見る人は要注意

このお話での鑢一族について（オリジナルの設定を含みます）

原作では前任者（例 六枝）が次世代（例 七花）に技を教えるという形で継承するのではなく。

鑢の血肉自体に技の記憶や戦いで経験値が蓄積されていき子を産むと親は格段に弱くなる（血肉の継承と呼ばれる）

刀語の原作にて鑢 七花が完了形変体刀へといたりしました。（あつていまずよね？）

主人公鑢 八交はその七花から産まれたので自我が芽生えた時点から完了形変体刀「虚刀」鑢」に既に至っている。（言い方があっていまずでしょうか）

なので八交は現行鑢一族最強

鑢一族の始まりは鑢 奇跡（オリキャラです。）

彼がプロローグにて誰かに約束を取り付けた人物

キス ボッチじゃなくなった 日記

つい先日キスをされた鑢八交だ。

あの後は大変だった。

とりあえずスーパーまで猛ダッシュ、近所のおば様達との特売品争奪戦。

そして何よりつらかったのが家について飯食って風呂入ってもう休めると思ったら搾られた。

何をとは言わないがカラツカラになるまで紅緋に絞られた。

終わったのが朝の6時、太陽が黄色く見えたよ。

学校に行く気が起きなかったが運よく日曜日で助かった。

昼を過ぎて紅緋になんでいきなり襲って来たんだと聞くと

”別の女の匂いがした”

だそうだ。

それで朝の6時まで絞られるんだからたまったものではない、と思いつつながら過ごした高校一年の5月の終わり一日。

絞られた日から数日経ちいざ学校にと思って玄関の扉を開けたら朱乃（そう呼ぶように強く言われた）がいた。

”これからは一緒に登校しませんか？”

と聞かれ断ろうとすると目を潤ませながらこっちを睨んでいたの
で お好きにどうぞ と言っておいた。

その言葉を聞くと花を咲かせたような笑顔を見せて俺の左腕に腕

を絡ませてきた。

ついでに大きなお胸も押し付けられたので 当たってますよと言ったら

“ 当てていますの ”

と返って来たのもうどうにでもなれと思って放置した。

この時考えたのは何故こんなに好かれているのか？

単純に俺が昔起こした殺戮現場を見たなら俺みたいな奴には普通近づかないはずなんだけどなあ？

まったく何が朱乃の中で起きたのやら、なんて考えていると学校の校門をくぐっていた。

……かなり視線が痛かったが、まあ無視だ。

別れ際に頬にキスをされて、朱乃を見送った後たぶん同じ学年の男子生徒が泣きながら殴りかかって来たので一本背負いで投げ飛ばしておいた。

たぶんあれは兵藤だったはず、そう思いながら嫌な予感が背筋を這いずり回った六月の頭の日。

それから夏休みに入るまで色々あった。

木場との放課後、剣道場で行うトレーニング（木場は試合とずっと言っている）

朱乃と過ごす昼休み（途中から朱乃が弁当を作ってくれるようになって食費が浮いて助かってる）

時々呼ばれてオカルト研究部にお茶をしばきに行く（ここに来るようになってから常々思っていたのだが、ここは本当にオカルトを研究しているのか？）

兵藤が謎に A DVD や エロ を待ってきて俺に見ると渡される（受け取りはしないが渡してくるときに 姫島先輩に嫌われる！ と涙ながらに言ってくる）

そして兵藤に絡まれているせいも絡んでくる奴が二人増えた（丸坊主と眼鏡どちらも下ネタやエロい話しかしてこない）
木場とトレーニングするようになってから俺の周りが華やかになった、と思いつながら過ごした七月の半ば。

夏休みをグータラ過ごしていたら事件が起きた。

ある

黒髪の女が俺の目の前で寝ていたので